

八百比丘尼（おびくに）^{でんせつ}伝説



八百比丘尼（おびくに）^{でんせつ}伝説は、日本の全国各地に^{のこ}残っています。西方町^{まなご}真名子にも^{おびくにどう}八百比丘尼堂と^よ呼ばれるお堂があり、次のような^{でんせつ}伝説が^{のこ}残っています。

「その昔、^{あさひてるのみこと}朝日輝命という人が、^{るろう}流浪の旅でたまたま^{まなご}真名子に

来た時、^{まなご}真名子の里に^{さと きょうぞく}凶賊が^{おうこう}横行して人々に^{きがい}危害を加え、^{さとびと}里人は^{にちや}日夜安じることができずに困っていることを知った。村人が^{まいとし}毎年一人ずつ娘を^{ひとみごくう}人身御供にささげていることを^き聞き、^{みこと}命が^{そく}賊を^{たいじ}退治したことから、^{さとびと}里人はこれに^{かんしゃ}感謝して^{みこと}命を引き留め、^{やしき}屋敷を^{あた}与えて^{じゅうきよ}住居をつく、^{まいとしみつ}毎年貢ぎ物を^{もの}納めて、^{おさ}やがて^{みこと}命を朝日長者と^よ呼ぶようになったという。

^{ちょうじゃ}長者はいつまで^た経っても子どもが生まれなかったため、^{さるたひこの}猿田彦^{かみ}神に^{きがん}祈願したところ、やがて女の子が生まれた。その子を^{やえひめ}八重姫と^{なづ}名付けて^{ふうふ}夫婦は大切に育てた。

^{ひめ}姫は生まれながらにして^{りはつ}利発であったが、ある日、父の^{たもと}袂に入っ

ていた貝かいの肉にくを食べた。美うつくしく育そだった姫ひめを嫁よめに欲ほしいと申もうし込こむ
者ものが多おおくなり、姫ひめはその煩わすらわしさに耐たえかねて家いえを出でて山やまへ姿すがたを
隠かくした。四、五年経たったと思おもった姫ひめは、家いえに帰かえろうと思おもい立ち、帰かえ
ってきてみれば不思議ふしぎにも数すう百ひゃく年ねんが過すぎていて、すでに両りょう親しんは死し
んでいて屋敷やしきもなくなり、屋敷跡やしきあとだけが残のこっていた。
姫ひめは、人世ひとよの無む常じょうを感じかんじ、自みら髪かみをおろし、尼あまとなつて、名も
「妙栄あらた」と改あらため、日本全国めぐを巡めぐり、若狭国わかさのくに（福井県ふくい）小浜おばまにたど
り着きき、ここで自すがた分の姿みすかを自みすから二きざ体きざ刻きざみ、一いつ体たいを真名子まなこに送おくり、
あとの一ひとつ体たいを小浜おばまに残のこし「この像ぞうを拜はいする者ものは寿じゅ命めいを保たもち長なが生き
するであらう」と言いい残のこして若狭わかさの海うみに身みを投なげた。姫ひめが八やっ百ひゃく歳さいの
ときであったという。」

（「西方町の民俗」西方町より）